

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第1回 大海原の王「大友宗麟」

時は今から約450年前の戦国時代。織田信長や豊臣秀吉などが天下人を目指していた頃、大分では、大友家第21代当主となった大友宗麟が豊後府内（現大分市）を拠点として東シナ海、南シナ海を舞台に活動していました。

当時の史料には、宗麟がカンボジア国王と外交関係を結び、巨大な船を仕立て、直接交易を行い、国王から「日本九州 大邦主」と呼ばれていたことが記されています。

これは、多くの大名が南蛮船や中国船の入港を待つといった受身的な姿勢であったのに対して、果敢に大海原に乗り出していたことを示しています。宗麟は、フランシスコ・ザビエルが日本を去る際にはインド総督やポルトガル国王への親書を託すなど、積極的な国際外交を行い、その優れた手腕により「大友宗麟」「豊後府内」の名声はヨーロッパの人々にも広く知れ渡ることになりました。

また、当時の中国沿岸には「倭寇」と呼ばれる人々が海賊行為、私貿易を盛んに行っていました。中国王朝はこの取り締まりの要請のため、豊後府内の宗麟のところへ使者を送ります。このことは、宗麟がシナ海や「倭寇」に対して大きな影響力を持っていた証拠であり、まさに「日本」の枠組みを超えた大名であったことを物語っています。



神宮寺浦公園に建つ「大友宗麟像」

市内勢家町にある神宮寺浦公園。春日浦ともいわれる付近一帯はかつて美しい海浜で、平安時代、近くに神宮寺が建立されていたことに由来しています。大友宗麟がこの付近の海岸を中心にポルトガルとの貿易を行ったといわれ、公園内には、それにちなんだ「南蛮貿易場跡」の碑とともに、陣羽織姿の堂々とした「大友宗麟」の像が、海に向かって建っています。

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第2回

天下人と大友宗麟

争いの絶えない戦国時代を生き抜くには、先を見通す見識と卓越した政治力が必要で、時の権力者(天下人)と良好な関係を結ぶことも重要な戦略の一つでした。

大友宗麟も、積極的に中央の室町将軍家とのつながりを深めていきました。それは、義鎮(後の宗麟)の「義」の字を時の将軍足利義晴から元服の際に一字をもらったことから、うかがい知ることができます。

また、宗麟と織田信長、両者の接触は意外と早く、信長が歴史の表舞台でスポットライトを浴びる以前から始まっていたようです。1567(永祿10)年、信長が33歳の時、「赤壁賦凶盆」という名盆せきへきふすぼんをすでに贈っており、早くから信長の実力を見抜いていた宗麟の先見性を垣間見ることができます。

1585(天正13)年に関白となった天下人豊臣秀吉は、大友氏と島津氏の戦い(豊薩戦争)に対し、すぐに争いをやめるように両者に停戦を命じます。宗麟は翌1586(天正14)年4月にこれを受諾することを表明するために大坂(現大阪市)にのぼり、新築されたばかりの大坂城で秀吉と謁見えっけんします。秀吉は宗麟に対し、その訪問を喜び、自ら城内を案内したといわれています。

このように宗麟は、将軍家や信長、秀吉などの有力武将と緊密な連携をとるなど、中央の動きを探るための情報ネットワークを構築し、地域国家(豊後を含めた北部九州6か国)の建設に尽力しました。こうした点にも、卓越した宗麟の政治力をうかがうことができます。



赤壁賦凶盆

(名古屋・政秀寺蔵/写真提供:根津美術館)
信長が天下人になる以前に宗麟が贈った漆製のお盆。

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第3回

西洋文化発展への系口

1578(天正6)年、宗麟48歳の時に洗礼を受けます。洗礼名は「フランシスコ」。生涯で最初に出会った宣教師であり、大きな影響を受けたフランシスコ・ザビエルにちなみ、宗麟自身が選びました。

宗麟とキリスト教との出会いは意外と早く、感受性豊かな16歳の時。1545(天文14)年、府内(現大分市)に近い港に中国船が入港し、船には6、7人のポルトガル商人が乗っていました。ポルトガル人が、種子島で初めて日本の土を踏んだわずか2年後の出来事です。初めて目にする西洋人に、府内のまちは騒然となったに違いありません。

このとき、宗麟(当時は義鎮)の父(義鑑)に「彼らを殺して財産を奪えばよい」と進言する者があり、父は殺害を企てようとしています。これを知った宗麟は、「欲にかられて罪もない外国人を殺してはならない。貿易をしようと遠方から来た彼らをむしろ保護すべきだ」と進言し、父の蛮行をいさめました。宗麟の進取・開明の気性が、府内の南蛮貿易への扉を開くことに大きく影響したのです。

その後、アラゴンというポルトガル商人が府内に訪れます。彼は、朝には書物、夕方にはコンタツ(キリスト教信者が使用する念珠)で祈りを唱えていました。宗麟は、片言交じりの日本語を話す彼に、信仰についてさまざまな問い掛けをする中で、次第に深い関心を寄せるようになります。このことが後にザビエルとの巡り合いへとつながり、豊後府内の華々しい西洋文化発展の端緒となったのです。



中世大友府内町跡から出土したメダイ(メダル)

【県教育庁埋蔵文化財センター蔵】

発掘調査では、真鍮製のチェーンや指輪、ペネチアンガラスなど、ヨーロッパから持ち込まれた品々のほか、キリスト教徒が身に付けていたメダイやコンタツも多数見つかっており、町人にまで信仰が根付いていたことを物語っています。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第4回

宗麟に優秀な家臣あり

戦国大名と言えば独裁者といったイメージがありますが、実際の領国支配は重臣たちの合議で決められることが一般的で、命令も多くが重臣たちの連名で伝えられました。

大友氏には、「加判衆」と呼ばれる重臣による組織がありました。大友氏にとって、こうした重臣たちと協力し、豊後国内の「安心・安全」を確実なものにすることが最も重要な責務のひとつであり、約400年続いた領国支配の基本でもありました。

宗麟には、特に「豊州三老」と呼ばれた戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理という優秀な3人の重臣がおり、北部九州6か国の守護となった宗麟を支えました。

中でも戸次鑑連(後の道雪)は、大友軍きつての猛将として知られています。若いころ雷に打たれ下半身不随になりながらも、戦場では駕籠に乗って出陣し、獅子奮迅の活躍により、軍勢の士気を大いに高めたことが伝えられています。

また、大友氏が日向高城・耳川合戦で島津氏に大敗し、領国支配の弱体化が進む中で、鑑連は1580(天正8)年2月に豊後国大野・直入郡の13人の武将に大友氏領国の危機的状況を訴える檄文を発し、領国支配体制の立て直しに奔走しました。

この3人の重臣が健在であった間に、宗麟の全盛期が築かれたと言っても過言ではありません。



【立花道雪画像】

(柳川市・福厳寺蔵)

宗麟は、大友氏に背いた筑前国の立花城主、立花鑑蔵を滅ぼした後、戸次鑑連に立花氏を継がせました。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639

大友宗麟の実像

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第5回 ヨーロッパ人からみた宗麟

大友宗麟公像
(JR大分駅前)



1551(天文20)年9月、キリスト教の布教活動のため日本(山口)に滞在していたフランシスコ・ザビエルは、大友宗麟の招きに応じ豊後府内の大友館を訪ねます。

イエズス会創設者の一人であったザビエルと宗麟の会見は、日本での本格的なキリスト教布教の幕開けとなる出来事であり、日本とヨーロッパの道が初めて開かれた瞬間でもありました。

2人のこの歴史的な出会いはセンセーショナルな史実としてヨーロッパに伝えられたようです。

左の写真は、17世紀前半に描かれた西洋画で、「豊後大名大友宗麟に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル」のタイトルが付けられています。この絵の舞台は言うまでもなく大友館であり、白い上衣をまとったザビエルに右手を差し出す西洋風の赤い衣裳の人物が、当時のヨーロッパの人々がイメージした大友宗麟(当時21歳)です。

2人の出会いから100年も経っていないヨーロッパの宗教絵画に記録された宗麟。彼は当時最も有名な日本人だったと言えるでしょう。

こうした背景には、宗麟の異国の文化を積極的に取り入れる進取・開明のグローバル精神があり、また、ザビエルとの面会はヨーロッパ世界にその名を知らしめるきっかけとなったばかりでなく、その後の宗麟の人生にも大きな影響を与えました。



〔St..Francis Xavier before Otomo Sorin,Daimyo of Bungo〕 イギリス王室宮廷画家のアンソニー・ヴァン・ダイク作 【ドイツ・ヴァイセンシュタイン城シェーンホルン伯爵コレクション】

大友宗麟の実像

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

第6回 名品コレクター「宗麟」

薩摩(現鹿児島)島津氏が、豊後に迫りつつあった1586(天正14)年4月、宗麟が大坂城に豊臣秀吉を訪ねたときのこと。秀吉が当時、茶の湯の第一人者であった千利休に「宗麟は茶が好きか」と尋ねたところ「なかなかの^{すきもの}数寄者です」と答えています。

茶の湯の世界ではその心を理解し、道具そろえや茶席の設定で表現できる者を数寄者と呼びます。宗麟の茶の湯への執心さを示すエピソードの一つです。

また、茶の湯では茶席を飾る道具と^{ぼくせき}絵画、墨跡が欠かせません。

宗麟は、博多の商人などとの交渉を通じ、大きな労力と大金をかけ、国内の各地から、名品を収集し、茶道具コレクションを充実させていきました。



上杉瓢箪(京都・野村美術館蔵)

大友宗麟旧蔵の茶道具。古くは大友瓢箪と呼ばれたが、後に豊臣秀吉から上杉景勝に伝来したため上杉瓢箪と名付けられた。

江戸時代に記された『大友興廢記』には、宗麟の所持していた茶道具14点、絵画・墨跡19点が記されています。この内、現存しているものは徳川博物館(水戸)が所蔵する「^{にった かつき}新田肩衝」、野村美術館(京都)の「^{ひょうたん}上杉瓢箪」と呼ばれる瓢箪茶入れ、出光美術館(東京)の^{ぎよくかん}玉潤作「^{しせいらんず}山市晴嵐図」の3点のみで、いずれも名品ばかり。

こうした名品の収集には、南蛮貿易によるばく大な利益が充てられたと考えられ、宗麟の経済力と茶の湯という当時の文化的教養への関心の高さを物語っています。

大友宗麟の実像

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第7回

宗麟は蹴鞠の名手

大友宗麟公像
(JR大分駅前)



日本古来の伝統的な球技に蹴鞠けまりがあります。鞠庭まりぼと呼ばれる15メートル四方の広場の中で、鹿皮で作られた鞠を8人ないし6人で地面に落とさないようにできるだけ多くの回数、蹴り上げ続けます。サッカーのリフティングをチームで行うようなイメージです。

戦国大名は武芸のみでなく、学芸にも秀でる教養人であることが求められました。

宗麟の祖父にあたる大友氏第19代義長は、大友家の安泰を固めるための「条々じょうじょう」と呼ばれる家訓を残していますが、その中で歌道・蹴鞠を軽んじて狩りを専らとすることを禁じています。大友家では武芸のみでなく学芸をも重視し、蹴鞠にも深い関心を示していました。



宗麟は、15歳のときに蹴鞠を本格的に始めています。蹴鞠の装束しゅうきくは身分や技量によって決められており、飛鳥井家を中心とする蹴鞠道家の許可がなければ着用できませんでした。

宗麟の蹴鞠の腕前はかなりのものであったようで、30歳のときには室町将軍・足利義輝から特に技量の勝った者に与えられる「香之上かうのかみ」という装束の着用が許されています。また、宗麟は蹴鞠の名手を指す「上足じょうそく」とも呼ばれ、現在でいえば、さながら名ストライカーといったところでしょうか。

当時の蹴鞠の様子

【国宝 上杉本洛中洛外図屏風(部分)
(米沢市上杉博物館蔵)】

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第8回

宗麟の築いたまち「府内」

戦国時代、宗麟は南蛮貿易を盛んに行い、その拠点となった豊後府内（現大分市）は大いに繁栄。まちにはヨーロッパ、東南アジア、中国などの品々があふれ、往来にはさまざまな国の人が行き交っていました。

象や虎など、当時としては珍しい動物も持ち込まれていたようです。

府内のまちは、大友館を中心に道路が東西南北に格子状につくられ、道路に沿って40余りのまちがありました。その規模は南北約2・1キロメートル、東西約0・7キロメートルの範囲におよび、現在の長浜町から元町周辺となります。

平成8年から本格的に始まった発掘調査の結果によると、当時の府内は、武家屋敷と商家が混在しており、「洛中洛外図屏風」に描かれる戦国時代の京都のまちに似たものであったと考えられます。また、戦国大名の館を中心とするまちと商業貿易都市がひとつになった、珍しい特徴も持っていたといえます。西の小京都と呼ばれた戦国大名大内氏の支配した「山口」や国際貿易都市として繁栄した「堺」、「博多」と肩を並べるまちだったのです。

府内は、キリスト教宣教師の記録の中でも、織田信長の「安土」や豊臣秀吉の「大坂」などと同等に扱われる、日本を代表する大都市であったことがうかがえます。



古地図・明治期の地籍図などを基に当時の府内を想像して描いた図(部分)
東には大分川が流れ、大友館を中心に家々が並び当時の府内の繁栄がうかがえます。
(現長浜町から元町付近)

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第9回

宗麟が過ごした正月

大友宗麟は、どんな正月を迎えていたのでしょうか。

宗麟の長男、義統がまとめた「當家年中作法日記」には、大友館で行われた年中行事や儀式のことが記されています。

この日記によると大友館の正月は、元日(旧暦)から始まる諸侍の参賀が1月15日まで続き、翌16日から「評定始」。今で言う仕事始めとなります。

大友館が壮大な建物であったことを物語るエピソードのひとつが、1月29日に行われた「大おもて節」(大おもての祝い日)。



大友館の復元イメージ

鈴木慎一氏(県立芸術文化短期大学准教授)作成

大友館には西日本最大級の規模を誇る庭園や能舞台など、さまざまな施設が造られていました。

正月の祝い飾りが据えられた「大おもて」と呼ばれる施設に数多くの武士が列席し、会食が行われたのです。

この日は「遠侍」と呼ばれる別の建物での会食も含め500人分の膳が用意されたことから、大おもてには、少なくとも200人以上を収容できる大きな座敷が備えられていたと考えられます。

祝いの席に参加した武士たちは、大おもての近くにあったであろう舞台上で演じられる能を観賞。能が終わると、いよいよ宴会の始まりです。その様子は、さながら正月明けの大新年会といったところでしょうか。

宗麟が迎える正月は、一年で最も盛大に行われるイベントだったのでしょ。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639

大友宗麟の実像



【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

第10回

宗麟と南蛮医アルメイダ

1545(天文14)年、宗麟が16歳のとき、弟の晴英が南蛮から伝来した鉄砲を試し撃ちした際に、鉄砲が暴発し手をけがしてしまいます。その傷は当時、府内(現大分市)に滞在していたポルトガル人によって手当てされ、宗麟は見たことのない進んだ西洋医術に大きな驚きと興味を持ったようです。それは、後に府内が西洋式病院発祥の地となることにつながっていきます。

1555(弘治元)年、宗麟の保護のもと行われたキリスト教の布教活動に、ポルトガル人のルイス・デ・アルメイダが加わります。医師でもあったアルメイダは、貧しさから子どもを手放す親の姿に心を痛め、宗麟の賛同を得て、同年、府内に育児院を建てます。

また、2年後には日本初の西洋式病院が開設され、内科は日本人の修道士、外科はアルメイダが担当し日本で最初の外科手術も行われました。

病院は入院病棟を備え、不治の病の患者なども受け入れ、ミゼリコルディア(ポルトガル語で「慈悲」を意味)といわれる組織の献身的な看護により支えられていました。府内はボランティア発祥の地でもあったのです。

南蛮医アルメイダの名声は全国に広がり、遠く京都や大阪などからも患者が訪れたといわれています。この背景には、若き宗麟の西洋医術に対する強い関心があったからでしょう。



西洋医術発祥記念像(遊歩公園)
外科手術を行うアルメイダ(中央)

アルメイダの精神は、1969(昭和44)年4月、大分市医師会によって設立された「大分市医師会立アルメイダ病院」の病院名によって現代に顕彰されています。

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

第11回

宗麟がつなぐネットワーク

大友宗麟は、南蛮貿易を積極的に進めるとともにキリスト教の布教を許可しました。これにより、多くの宣教師が豊後府内(大分市)を拠点に日本各地で布教活動を行うこととなります。

その足跡は、今も市内各所に残っており、その一つが野津原地区の今市。江戸時代の参勤交代に使われ、肥後街道として熊本へと続くこの道ですが、それ以前から宣教師たちはここを頻繁に利用しています。当時、彼らが豊後から長崎へ向かうとすると、薩摩を回る海路は島津氏、肥前を通る長崎街道は龍造寺氏に阻まれていました。そこで、その間を縫うように九州の中央部、肥後から豊後に至る帯状に支配地域を広げていた大友氏の領域を往来。宗麟が保護したルートを利用したのです。



今市石畳(県指定史跡)

江戸時代の肥後街道の一部で、豊後鶴崎と肥後熊本を結ぶ歴史ある道。全長660mの道の中央部分に全面平石が敷き詰められ、今も往時の姿を残しています。

このルートは近年、研究者により「キリシタンベルト」と名付けられています。肥後からは有明海、島原半島を経由し、その先は長崎に通じていました。長崎からは大海原を渡ってヨーロッパまでつながり、府内からは瀬戸内海を通して泉州堺(大阪府堺市)、そして都(京都)まで延びていたといわれています。ここから、人だけでなくさまざまな物資や情報が行き交ったと考えられています。

日本を、そして世界を横断するネットワークを宗麟が意図したものであるなら、その類いまれなる広い見識には驚かされます。

大友宗麟の実像



【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地を国際文化都市として繁栄させた大友宗麟公をシリーズで紹介する「大友宗麟の実像」。今回はその最終回。】



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

最終回

宗麟を誇りに

宗麟は、「進取※」の気性に富んだ人物であり、「能」や「茶道」^{けま}「蹴鞠」といった日本の伝統文化をしっかりと継承しながらも、国外の文化を積極的に取り入れました。その結果、全国に先駆けて西洋と東洋の出会いが演出され、豊後府内は、南蛮文化の薫る異国情緒あふれるまちとして発展したのです。

歴史上で「戦国大名」と呼ばれる枠組みとは異なり、そのダイナミックでグローバルな活動により、アジアのみならずヨーロッパにおいても高く評価された宗麟。学識経験者や市民代表からなる「大友宗麟プロモーション検討委員会」は、今年の3月に、宗麟を戦国一の『NANBAN』大名と位置付け、市の顔として全国に情報発信する方策について検討する必要性を求めました。

人にはさまざまな一面があり、歴史上の人物に限らず三者三様の評価があるのも事実です。宗麟を学ぶうえで、歴史資料を丹念にひも解くとともに、発掘調査で発見される遺跡や遺物から発せられる「地中からのメッセージ」に注意深く耳を傾け、新たな宗麟の実像に迫っていく必要があります。

そして、宗麟を市民の誇りとして後世にしっかりと伝えていくことが、現代に生きるわたしたちに求められているのではないのでしょうか。

※進取とは、自ら進んで物事に取り組むこと



【明ける海】 1966(昭和41)年 高山辰雄作

大分文化会館の緞帳(どんちょう)の原画として、大友宗麟時代の豊後府内をイメージして描いた作品。別府湾に停泊する南蛮船やヨーロッパの宣教師をはじめ、さまざまな国の人々・動物などが描かれている。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639